



軸一六八〇×二六五本紙六〇×三六〇（単位㎢）

風わたる遠松原の音聞ゆ

きのふもけふも冴えかへりつつ

赤彦

私のライフワークの一つとして古書店のネットサーフィンがある。

先般、古書店のホームページを渉猟していると、島木赤彦の文字が目に入ってきた。詳しく見てみると、掛け軸の商品紹介の一つとして写真入りで紹介してあった。迷いながらも歌が気に入って早速購入した。

内容は、もともと短冊であったものを軸装にしたようで、「風わたる遠松原の音聞こゆ昨日も今日も冴へかへりつつ」の歌と落款が墨書で記してあるものであった。『赤彦全集』で確認したところ、この歌は大正十三年十一月刊行の『太虚集』の「大正十二年」の章の「春」の項目の十一首目に掲載されている自然詠の歌であった。同じ「春」には柿蔭山房から赤彦の墓所に行く道すがらの高木津島神社わきに歌碑として建立されている「高槻のこずゑにありて頬白のさへづる春となりけるかも」が収載されている。

『太虚集』は赤彦芸術の頂点として寂寥森厳の歌風を大成したともいわれる歌集で、この短冊の歌はその中から赤彦が短冊に記すほどの出来であったものと思われるし、『太虚集』に至った時代の一つの記念碑とも考えられるのではないだろうか。

赤彦にとって大正十二年、大正十三年は激動の年であった。

九月一日の関東大震災発生。斎藤茂吉はドイツ留学中。赤彦は長野県東筑摩郡で講義中であつた。その後直ちに上京して震災の生々しい傷跡の中で「アララギ発行所」にかけつけ、さらには遭難した同人たちを慰問してまわった。こうして震災の被害状況を把握した後、信州へ戻り「アララギ震災報告号」を上諏訪から発行するということをした。震災で他の同人誌が休刊する中、新聞などのマスコミにも引けをとらない活動でした。

十月には満州鉄道の招きによる満州講演旅行。

十一月には「アララギ震災号」『第一赤彦童謡集』発行と、活力に満ちた時期でした。

大正十三年四月は、「日光」創刊の年で、「アララギ」から古泉千樫、釈迢空・石原純が参加したことで赤彦は大きな衝撃を受けた。同じく四月に『歌道小見』刊行。その後作歌活動は鍛錬道であると説くに至り、その歌境は多くの門下生たちに深い感銘を与えた。

さらに十一月には『太虚集』が刊行された。斉藤茂吉は「歌の極致」と絶賛した。

以上のように大正十二年、大正十三年は激動の中で自身の作歌活動も充実の一途をたどるといえる年であった。その歌には自身を見つめて澄んだ視線とその深さが静かにすべてをとらえつくす雑味のない歌境が見て取れる。この短冊の歌の結句「冴えかへりつつ」の心境がまさに『太虚集』の境地の表れととらえると、赤彦がこの歌を選んで記したことも納得がいくように思える。

\*本稿は、「島木赤彦研究会会報第七十四号」島木赤彦研究会 令和五年十二月二日の拙稿に訂正、加筆をしたものである。

#### 【参考文献】

- ・島木赤彦研究会編『島木赤彦文学アルバム』（株）謙光社昭和五十年八月二十五日
- ・久保田俊彦『赤彦全集』第八巻、九巻岩波書店昭和四十五年三月二十四日
- ・「島木赤彦研究会会報第七十四号」島木赤彦研究会 令和五年十二月二日